

かなでほんちゅうしんぐら

# 仮名手本忠臣蔵

## 〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しようらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気の高い作品でした。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられています。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色です。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのお）、大石内蔵助を大星由良助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあります。

本筋の義士劇の他に、若狭助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えています。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲です。

「あらずじ」

## 《大序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることとなります。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分けます。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭助は、兜を宝蔵に納めに行きます。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説きますが、戻ってきた若狭助の機転により、顔世はその場を逃れることができず、怒った師直は若狭助を罵倒、若狭助はかろうじて憤りを抑えます。

## 《二段目》

塩冶判官の国家老・大星由良助の子息である力弥は、明日の登城時間を知らせる使者として桃井家へやってきます。家老・加古川本蔵の娘・小浪が受け取りに出ますが、許嫁である力弥に見とれてしまいます。そこへ若狭助が出てきて口上を受け取り、力弥は帰って行きます。

桃井家の奥座敷。若狭助は、本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だと打ち明けます。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べます。

## 《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結び、師直の勧めで共に門内に入ります。

〔文使いの段〕 やや遅れて、塩治判官が早野勘平を供に登城。さらに、腰元おかるが顔世から師直への文箱を届けに来ます。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入ります。お軽に横恋慕する鷺坂伴内がやつてきておかるをくどきますが、戻ってきた勘平に追い払われ、おかると勘平は二人きりの時を過ごします。

〔殿中刃傷の段〕「おのれ師直、真二つ」と意気こむ若狭助の前に現れた師直は、前日とは打って変わって低姿勢。金と言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができせん。判官がやつてきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしと悟り、判官に散々当てこすりを言います。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまいます。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵でした。

〔裏門の段〕館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動転します。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようと思しますが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆきます。

## 《四段目》

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来ます。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良助が駆けつけます。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶えます。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡します。

## 《五段目》

山崎で獵師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れます。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺されます。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばら貫きます。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間でした。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追います。

## 《六段目》

〔身売りの段〕 勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていました。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のもと同じなので勘平は苦悶します。おかるは別れを惜しんで連れて行かれます。

〔勘平腹切の段〕 そこへ獵人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできました。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は色々と尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出てきます。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣きます。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来ました。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えます。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語ります。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃つて、親の仇討ちをしたことがわかります。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶えます。

## 《七段目》 一力茶屋の段

大星由良助は祇園の一力で遊蕩に耽っていました。血気の若侍が煽つても、足軽の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれています。そこへ由良助の息子・力弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来ます。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からはおかるが盗み読んでいま

した。由良助はそれに気づき、おかるの身請け話を決めます。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話を聞くうちに由良助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとします。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良助が現れ、平右衛門には供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

## 《三段目》文使いの段

御門に入りける。

ほどもあらず入り来るは塩谷判官高定。これも家来

を残し置き、乗物道に立てさせ、譜代の侍早野勘平、朽

葉小紋のさら袴ざわ／＼ざわつく御門前。

「塩谷判官高定登城なり」

とおとなひける。門番まかり出で

「さきほど桃井様御登城遊ばされ御尋ね。只今また師

直様御越しにて御尋ね。はや御入り」

と相述ぶる。

「ナニ勘平。もはや皆々御入りとや。遅なはりし、残念」

と勘平一人御供にて御前へこそは急ぎ行く。奥の御殿

は御馳走の、地謡の声播磨湯

へ高砂の浦に着きにけり／＼

謡ふ声々門外へ、風が持て来る柳蔭。その柳より風俗は、

負けぬ所定の十八九、松の緑の細眉も、堅い屋敷に物馴

れし、奇特帽子の後帯。供の奴が提灯は、塩谷が家の紋

所。御門前に立休らひ

「コレ奴殿。やがてもう夜も明ける。こなた衆は門内へ

は叶わはぬ。こゝから去んで休んでや」

と、詞に従ひ

「ナイ／＼」

と、供の下部は帰りける。内を覗いて

「勘平殿はなにしてぞ。どうぞ逢ひたい用がある」

と、見廻す折から、後影、ちらと見付け

「おかるぢやないか」

「勘平様逢ひたかつたに、ようこそ／＼」

「ム、合点のゆかぬ夜中といひ、供をも連れず只一人」

「さいなア、こゝまで送りし供の奴は先へ帰した、私一

人残りしは、奥様からのお使ひ。どうぞ勘平に逢うてこの文箱。判官様のお手に渡し、御慮外ながらこの返歌を御前のお手から直ぐに師直様へ、お渡しなされ下さりませと伝へよ。しかしお取込の中、間違ふまいものでなし。マア今宵はよしにせうとのお詞。わたしはお前に逢ひたい望み、なんのこの歌の一首や二首。お届けなさるゝほどの間のないことはあるまいと、つい一走りに走つて来た、ア、しんどや」

と吐息つく。

「しからばこの文箱。旦那の手から師直様に渡せばよいぢやまで。どりや渡しして来う待つてゐい」

という中に門内より

「勘平〜〜判官様が召します。勘平〜〜」

「ハイ〜〜只今それへ。エ、忙しない」

と袖振切つて行く後へ、どぜう踏む足付き鷺坂伴内

「おかぼう〜、コレおかぼう。ハ、ハ、ハ、なんとおかる。恋の知恵はまた格別。勘平めとせ〜くつてゐるところを、勘平〜〜旦那がお召しと呼んだはきついか〜きついか。ハ、ハ、師直様がそもじに頼みたいことがあると仰しやる。我らはそさまにたつた一度。君よ〜」

と抱付くを、突飛ばし

「コレ猥らなことを遊ばすな。式作法のお家にいなから狼藉千万。あた不作法なあた不行儀」

と、突退くれば

「それはつれない。暗がり紛れについちよ〜〜」

と、手を取り争ふその中に

「伴内様〜。師直様の急御用。伴内様〜」

と、奴二人がうろうろ目玉で

「これはしたり伴内様。最前から師直様が御尋ね、式作法のお家にゐながら、女を捕へあた不行儀な、あた不



法

と、下部が口々。

「エ、同じやうになにぬかす」

と、面ふくらして連立ち行く。勘平後へ入替り

「なんと今の働き見たか。伴内めが一杯喰うて失せをつた。俺が来て旦那が呼ばしやると言ふと、おけ古いとぬかすが面倒さに奴共に酒飲ませ、古いと言はさぬこの方便。まんまと首尾は仕おほせた」

「サアその首尾ついにな、ちよつと〜〜と手を取れば

「ハテ扱はづんだマア待ちやいの」

「なに言はんすやら、なんの待つことがあろぞいなア。

もうやがて夜が明けるわいな。是非に〜〜」

是非なくも、下地は好きなり御意は善し

「それでもこゝは人出入り」

奥は謡の声高砂

〱松根に倚つて腰をすれば

「アノ謡で思ひ付いた。イザ腰掛けで」

と手を引合ひ、打ちつれてこそ

## 《三段目》裏門の段

立騒ぐ

表御門裏御門、両方打つたる館の騒動提灯ひらめく大騒ぎ。早野勘平うろくく眼まなこ走り帰つて裏御門、碎けよ破れよと打叩き大音声だいおんじよう

「塩谷判官の御内早野勘平、主人の安否心もとなし。」

こゝ開けてたべ早くくく」

と、呼ばはつたり。門内よりも声高々

「御用あらば表へ廻れ、こゝは裏門」

「なるほど裏門合点。表御門は家中の大勢早馬にて寄り付かれず、喧嘩の様子は何とくく」

「ホ、ウ喧嘩の次第相済んだ。出頭の師直様へ慮外致せし科によつて、塩谷判官は閉門仰せ付けられ、網乗物あみのりものにてたつた今帰られし」

と、聞くより

「ハア南無三宝、お屋敷へ」

と、走りかゝつて

「イヤくくく閉門ならば館へはなほ帰られじ」

と、行きつ戻りつ思案最中。腰元おかる道にてはぐれ

「ヤア勘平殿、様子は残らず聞きました。こりや何とせうどうせう」

と、取付き嘆くを取つて突退け

「エ、めろくくとほえ面、コリヤ勘平が武士はすたつたわやい。もうこれまで」

と、刀の柄。

「コレ待つて下され。こりやうろたへてか勘平殿」

「オ、うろたへた。これがうろたへずに居られやうか。

主人一生懸命の場にも在り合わず、あまつさへ凶人めしやど同然の網乗物お屋敷は閉門、その家来は色に耽りお供

にはづれしと人中へ、両脇差し出られうか。こゝ放せ」

「マア／＼待つて下さんせ、マア／＼待つて下さんせ  
イナア。もつともじや道理ぢやが、その狼狽武士うろたえには誰  
がした。皆わしが心から死ぬる道ならお前より私が先  
へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰が侍ぢやと  
誉めます。こゝをとつくりと聞き分けて、私が親里へ  
ひとまづ来て下さんせ。父様も母様も在所でこそあれ  
頼もしい人、もうかうなつた因果ぢやと思つて女房の  
言ふ事も聞いて下され勘平殿」

と、わつとばかりに泣き沈む。

「さうぢやもつともそちは新参なれば、委細の事は得  
知るまい。お家の執権大星由良助殿、今だ本国より帰ら  
れず、帰国を待つてお詫びせん。サア一時なりとも急が  
ん」

と、身拵へするその所へ 鷺坂伴内、家来引連れ駆出で

「ヤア勘平。うぬが主人の塩谷判官おらが旦那の師直  
様と何か知らぬが殿中において、あつちやの方でぼつ

ちやくちや、こつちの方でべつちやくちや、ちやつちや  
くちや／＼咄しのうち、小さ刀をちよつと抜いてちよ  
つと切つた科によつて、屋敷は閉門網乗物にてエツサ  
ツサ／＼、エツサツサ／＼、エツサツサとぼつ帰した。  
追付首がころりと飛ぶは知れたこと。サア腕回せ連れ  
帰つてなぶり切り、覚悟ひろげ」

と、ひしめけば

「よい所へ鷺坂伴内。おのれ一羽で食足らねど勘平が  
腕の細ねぶか、料理塩梅あんばい食うて見よ」

「ヤア物は言はずな家来ども」

「畏つた」

と、両方より

「取つた」

と、かゝるを

「まつかせ」

と、かいくゞり、両手に両腕捻<sup>ね</sup>ち上げ、はつし〜と蹴返せば、代つて切込む切先を、刀の鞘にて丁ど受け、廻つて来るを鐙<sup>こじり</sup>と柄<sup>つか</sup>にてのつけにそらし、四人一緒に切りかゝるを、右と左へ一時に、でんがく返しにばた〜と打据へられ、皆ちりぢりに行く後へ、伴内いらつて切りかゝる、引ばづしてそつ首握り、大地へどうともんどり打たせ、しつかと踏付け

「サアどうしようこうしようとどこつちのまゝ。突かうか切らうかなぶり殺し」

と、振上ぐる刀に、すがつて

「ア、コレ〜そいつ殺すとお詫びの邪魔。もうよいわいな」

と留める間に、足の下をこそ〜こつこそ、尻に尾の

ない鷲坂は頭はあるかと振つてみて、

「あるとも〜大丈夫」

命からがら逃げて行く。

「エ、残念々々、さりながらきやつをばらさば不忠の不忠。ひとまず夫婦が身を隠し、時節を待つて願うて見ん」

もはや明六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離れ飛ぶ鳥かはい〜の女夫連れ<sup>みょうと</sup>、道は急げど後へ引く、主人の御身いかがと案じ行くこそ

## 《六段目》身売りの段

急ぎける。

所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、暁かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投島田、結ふに言はれぬ身の上を、誰にか柘植つげの水櫛に、髪の色艶梳き返し、品よくしやんと結び立てしは、在所に惜しき姿なり。母の齡よわいも杖つきの、野道とぼとぼ立ち帰り、

「オ、娘、髪結ひやつたか。美しうよう出来た。イヤもう、在所はどこもかも麦秋時分で忙しい。今も藪隙で若い衆が麦かつ歌に、『親父出て見やばゝん連れて』と唄ふを聞き、親父殿の遅いが気に掛り、在口まで行たれど、ようなう影も形も見えぬ」

「サイナ、こりやまあどうして遅い事ぢや。わし、一走り見て来やんしよ」

「イヤノウ、若い女子一人歩くは要らぬ事。殊にそなたは小さい時から在所を歩くことさへ嫌ひで、塩谷様へ御奉公にやつたれど、どうでも草深い処に縁があるやら戻りやつたが、勘平殿と二人居やれば、おとましい顔も出ぬ」

「オ、かゝ様のそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの、在所はおろかどんな貧しい暮らしでも苦にならぬ。やんがて盆になつて、『とさま出て見やかゝんつ、かゝん連れて』といふ唄の通り、勘平殿とたつた二人、踊り見に行きやんしよ。かゝさん、お前も若い時覚えがある」

と、差し合ひくらぬぐわら娘、気もわさわさと見えにける。

「イヤノウ、なんぼその様に面白をかしう言やつても、心の中はの」

「イエイエ、済んでござんす。主のために祇園町へ勤め奉公に行くは、かねて覚悟の前なれど、年寄つて父さんの世話やかしやんすが」

「そりや言やんな。小身者なれど兄も塩谷様の御家来なれば、外の世話する様にもない」

と親子話の中道伝ひ。駕籠を昇かせて、急ぎ来るは祇園町の一文字屋。

「エ、コウツト、確かこの松の木から、一軒、二軒、三軒目。オ、こゝぢや、こゝぢや」

と門口から。

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば、

「これはく遠い処を、ソレ娘、煙草盆、お茶あげまし

や」

と親子して、槌で御家を白人屋の亭主、

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀、別条なう戻られましたかな」

「エ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前へ往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬか。ハテ面妖な。ハア、もし稲荷前をぶらついてかの玉どんに摘まりやせぬかの。コレ、この中

こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年も丸五年切り。給銀は金百両、さらりと手を打った。これの親父が言は

るゝには『今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晚証文を認め、百両の金子きんすお貸しなされて下され』と涙をこぼ

しての頼み故、証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引き換への契約。何がその五十両渡すとの、喜んで戴き、

ほたほた言ふて戻られたはもう、四つでもあらうかい。

夜道を一人金持つてゐらぬものと、留めても聞かず戻られたが、但しは道に」

「イエイエ、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せきと戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「イヤイノ、コレ／＼合点のいくいかぬはそつちの穿鑿。せんさくこつちは下がりの金渡して、奉公人を連れて去

の」

と、懐より金取り出だし、

「跡金の五十両、これで都合百両。サア渡す、受取らしやれ」

「お前、それでも親父殿の戻られぬ中は、のうかる、わが身はやられぬ」

「ハテぐづぐづ／＼と埒の明かぬ。コレ、ぐつともすつ

とも言はれぬ与市兵衛の印形、証文が物言ふわいの、これ証文が。今日から金で買ひ切つた体、一日違へばれこづゝ違ふ。どうかうせぎ済むまい」

と手を取つて引立つる、

「マアマア待つて」

と取り付く母親、突き退け跳ね退け、無体に駕籠へ押し込み押し込み、鼻きあぐる門の口。鉄砲に蓑笠打ち掛け、戻りかゝつて見る勘平、つかつかと内に入り、

「駕籠の中なは女房ども、コリヤマアどこへ」

「オ、勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」

と母の喜び、その意を得ず、

「どうでも深い訳がある。母者人、女房ども、様子聞かう」

とお上の真中、どつかと坐れば、文字の亭主、

「ハ、ア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。いやも、

たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許婚の夫などと、脇より違乱妨げ申す者これ無く候』と、親父の印形あるからは、こちらには構はぬ。早う奉公人を受取らうかい」

「オ、婿殿合点が行くまい。かねてこなたに金の要る様子、娘の話で聞いた故、どうぞ調べて進ぜたいと言ふばかりで一銭の当てもなし。そこで親父どのの言はしやるには、ひよつとこなたの気に、女房売つて金調へ様と、よもや思ふてではあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつそこの与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売らう、まさかの時は切取りするも侍の習ひ、女房売つても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調べておましたら満更腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極はめに往て、今に房らしやれぬ故親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、昨夜

親父殿に半金渡し跡金の五十両と引き換へに、娘を連れて去なうと言ふてなれど、親父殿に逢ふての上と訳を言ふても聞き入れず。今連れて去なしやるどころ、どうせうぞ、勘平殿」

「ハ、これはこれは、まづ以て舅殿の心遣ひ忝ない。したがこちらにもちつとよい事があれども、マアそれは追つて。親父殿も戻られぬに、女房どもは渡されまい」

「とはまた何故に、とは何故に」

「ハテ、いはゞ親なり判がゝり。尤も夕べ半金の五十両渡されたでもあらうけれど」

「ア、これいのこれ、京大坂を股にかけ女護島程奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したと言ふて済むものかいの、コレ済むかいの。まだその上に慥かな事があるてや。これの親父がかの五十両といふ金を手拭にくるくると巻いて懐に入れらるゝ。『ア、そりや危ない



危ない／＼。これに入れて首に掛けさつしやれ』と、俺が着てゐる、コ、ココ、この単物の縞ひしめんの切れで拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻られう』

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの、金財布か」

「オ、てや」

「あの、この縞でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」

と、聞くより『ハツ』と勘平が肝先にひしと堪へ、傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入り縞。『南無三宝、さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは舅であつたか、ハア、ハツ』と、我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ、とは知らずして女房、

「コレこちらの人、そはそはせずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さいせ」

「ム成程。ハテもうあの様に慥かに言はるゝからは、行きやらずばなるまいか」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」

「ア、イヤイヤ、親父殿にも、今朝ちよつと逢うた、が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父つさんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてばかり」

と言ふに文字も凶に乗つて、

「それを見みいなどどうぞすえ。七度尋ねて人疑へぢや。親父の在り所の知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやともにでんど沙汰。マアマアさらりと済んでめでたい、めでたい、ハ、ハ、ハ、ハ。お袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。サアサアお娘、早ふ駕籠に乗りや／＼」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。

年寄つた二人の親達、どうでござんさんの皆世話。取り分けて父つさんはきつい持病。気を付けて下さんせ」

と、親の死に目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ、『いつそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』と、心を痛め堪へ居る。

「オ、婿殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であらう」

「イエイエ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、悲しうもなんともない。わしや勇んで行く、母さん、したが父つさんに逢はずに行くのが」

「オ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬ様に灸据ゑて、息災な顔見せに来てたも

ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ、ヤ、ヤ。鼻紙扇もなけりや不自由な。なんにもよいか。ソレとばついて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

「なんの因果で人並な娘を持ち、この悲しい目を見る事ぢや」

と、齒を食いしばり泣きければ、娘は駕籠にしがみつき、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てず咽せ返る。情なくも駕籠早き上げ、道を

## 《六段目》勘平腹切の段

知つたる折こそあれ。

深編笠の侍二人、

「早野勘平在宿をし召さるゝか、原郷右衛門、千崎弥五郎、御意得たし」

と訪へば、折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出で迎ひ、

「これは〱御両所共に見苦しきあばら家へ御出で、忝なし」

と、頭を下ぐれば郷右衛門、

「見れば家内に取り込みもあるさうな」

「ア、イヤ、もう些細な内証事。御構ひなくともいざまづあれへ」

「然らば左様に致さん」

と、ずつと通り座に着けば。二人が前に両手を付き、

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、申し開かん詞もなし。何卒 それがし 某が科御許しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に、御両所の御取り成し、偏へひとに頼み奉る」

と、身をへり下り述べければ。郷右衛門取りあへず、

「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として、多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ金子は封の儘相戻さるゝ」

と、詞の中より弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば、『ハッ』とばかりに気も顛倒てんたう、母は涙と

諸共に、

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今、親の罰思ひ知つたか。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、婿の為に娘を売り、金調へて戻らしやるを待ち伏せして、ア、アレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当て、下されぬは、神や仏も聞こえませぬ。あの不孝者、御前方の手に掛けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」

と、身を投げ伏して泣きあたる。聞くに驚き兩人刀追つ取つて弓手馬手ゆんでめてに詰め掛け、弥五郎声を荒らげ、

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよと言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳にも入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は大身槍の

田楽刺し、拙者が手料理振舞はん」

と、はつたと睨めば郷右衛門、

「渴しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ハ、天晴れ。さりながら、

ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こなく、こなく、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁へなき、汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入りし」

と、鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば、堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を、抜くより早く腹へぐつと突き立て、

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし

事、亡君の御恥辱とあらば一通り申し開かん、兩人共に

まづ、まづ、まづ／＼／＼聞いてたべ。夜前弥五郎殿の

御目に掛かり、別れて帰る暗紛れ、山越す猪ししに出合ひ、

二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば、猪にはあ

らで旅人、南無三宝誤つたり。藁はなきかと懐中を探し

見れば、財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、

天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き、弥五郎殿にか

の金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、

撃ち止めたるは、わが舅。金は女房を売つた金、か程迄

する事なす事、いすかの嘴程違ふといふも、武運に尽き

たる勘平が、身の成り行き推量あれ」

と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより弥五郎ずんど

立ち上り、死骸引き上げ打返し、『ムウ、ム』と疵口改

め、

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこ

れは刀で抉つた疵。勘平早まりし」

と、言ふに手負も見てびつくり、母も驚くばかりなり。

郷右衛門心付き、

「イヤコレ千崎殿、ア、これにて思ひ当つたり。御自分

も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人

の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、

見限つて勘当したる悪党者。身の竹たなすみなき故に、山賊

すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つたは

彼奴きやつが業わざ」

「エ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者でござ

りますか。ハア」

『ハツ』と母は手負に縋り、

「コレ、手を合はして拝んます。年寄りの愚痴な心から

恨み言ふたは皆誤り、堪へて下され勘平殿、必ず死んで

下さるな」

と泣き詫ふれば、顔振り上げ、

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」

と、突込む刀引廻せば、

「ア、暫く〜。思はずもその方が舅の敵討つたるは、未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて、一功立つたる勘平、息のあるうち郷右衛門が、密かに見する物あり」

と、懐中より一巻を取り出だし、さら〜と押し開き、

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し、一味徒党の連判かくの如し」

と、読みも終らず苦痛の勘平、

「シテその姓名は、誰々なるぞや」

「オ、徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加へ一味の義士四十六人。これを冥途の

土産にせよ」

と、懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し、

「勘平、血判」

「オ、心得たり」

と、腹十文字に掻き切り、臓腑を掴んでしつかと押し、

「サ血判、仕つた」

「ア、コリヤ乗るな〜。早野勘平繁氏、血判確かに相済んだぞ」

「チエ、忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と、言ふに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出だし。

「勘平殿の魂の入つたこの財布、婿殿ぢやと思つて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オ、成程、尤もなり」

と、郷右衛門金取り納め、

「思へば思へばこの金は、縞の財布の紫摩黄金、仏果を  
得よ」

と言ひければ、

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬ〜。魂魄この土に留  
まつて、敵討ちの御供する」

と、言ふ声も早四苦八苦、『惜しや不憫』と兩人が、浮  
む涙の玉の緒も、切れてはかなくなりにつけり。

「ヤア、ヤア〜、もう婿殿は死なしやつたか。さても  
〜世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。

親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ婿を先立て、いとし  
可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つ  
てこれがマア、何と生きてみられうぞ。コレ親仁殿、与  
市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と、取り付いては泣き叫び、また立ち上つて、

「ア、コレ婿殿、母も共に」

と、縋り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは  
『わつ』とばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きしは、  
目も当てられぬ次第なり。郷右衛門突立ち上がり、

「これ〜老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最期  
の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あ  
らん。首に掛けたるこの金は、婿と舅の七七なななぬか日。四十九  
日や五十両、合はせて百両百ヶ日の追善供養、後懇ろに  
弔はれよ。さらば〜」

「おさらば」

と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはかな  
き次第なり。

## 《七段目》 一力茶屋の段

折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔ひ醒まし、早廓さくろ馴れ  
て吹く風に、憂さを晴らしてゐる所へ

「ちよと往て来るぞや。由良助ともあらう侍が、大事の  
刀を忘れて置いた。つい取つて来るその間に、掛物も掛  
け直し、炉の炭もついで置きや。ア、それくく、こ  
ちらの三味線踏み折るまいぞ。これはしたり、九太はも  
ふ去なれたさうな」

あたり見廻し由良助、釣燈籠の明りを照らし、読む長文ながかみ  
は御台より敵の様子細々と、女の文の後や先、参らせ候  
ではかどらず、余所の恋よと羨ましく、おかるは上より  
見下ろせど、夜目遠目なり字性じしやうもおぼろ、思ひ付いた  
る延べ鏡、出して写して読み取る文章、神ならず、ほど  
けかゝりしおかるが簪、バツタリ落つれば、下には『ハ

ッ』と見上げて後へ隠す文、上には鏡の影隠し

「由良さんか」

「おかるか。そもじはそこに何してぞ」

「わたしやお前に盛り潰され、あんまり辛さに酔ひ醒  
まし。風に吹かれてゐるわいな」

「ムウ、ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる、  
ちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝから  
は言はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか」

「話したいとは、頼みたい事かえ」

「マアそんなもの」

「廻つて来やんしよ」

「イヤイヤ、段梯子へ下りたらば、仲居が見つけて酒に  
せう。ア、どうせうな。ア、コレコレ、幸ひこゝに九つ  
梯子、これを踏まへて下りてたも」  
と、小屋根に掛ければ



「この梯子は勝手が違うて、オ、恐。どうやらこれは危  
いもの」

「大事な、／＼。危ない恐いは昔の事、三間づゝまた  
げても赤膏薬も要らぬ年配」

「阿呆言はんすな。船に乗つた様で恐いわいな」

「道理で、船玉様が見える」

「ヲ、覗かんすないな」

「洞庭の秋の月様を、拝み奉るぢや」

「イヤモウ、そんなら降りやせぬぞえ」

「降りぞ降ろしてやろ」

「アレまだ悪い事をアレアレ」

「喧やかましい、生娘か何ぞの様に、逆縁ながら」

と後より、ぢつと抱きしめ、抱き降ろし。

「何とそもじは、御覧じたか」

「アイ、いいえ」

「見たである、／＼」

「何ぢややら面白さうな文」

「アノ、上から皆読んだか」

「オ、くど」

「ア、身の上の大事とこそそはなりにけり」

「何の事ぢやぞいな」

「何の事とはおかる、古いが惚れた、女房になつても

らぬか」

「おかんせ、嘘ぢや」

「サ、嘘から出た真でなければ根が遂げぬ。応と言や、

／＼」

「イヤ、言ふまい」

「なぜ」

「お前のは嘘から出た真ぢやない。真から出た、皆嘘」

「おかる、請け出さう」

「エ、」

「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けせう」

「イヤアノ、わしには」

「間夫があるなら添はしてやる」

「そりやマアほんかえ」

「侍冥利。三日なりと困うたら、それから勝手次第」

「ハア嬉しうござんす、と言はして置いて笑おでの」

「イヤ、直ぐに亭主に金渡し、今の間に埒らちさせう。氣遣

ひせずと待つてゐや」

「そんなら必ず待つてゐるぞえ」

「金渡しして来る間、どつちへも行きやるな。女房ぢやぞ」

「それもたつた三日」

「それ合点」

「エ、忝うござんす」

「どりや、金渡しして来うか」

「ア、騒ぐはく。さすがは花の祇園町、テモにぎわし

いこつたなあ。ア、なんとやら、入相の鐘は廓の夜明け

かな、とはよく言つたものだなアハ、ハ、ハ。それはさ

うとどうぞ首尾よう妹に逢ひたいもんだが、幸ひの女

中、ちよと物が尋ねたい。この郭に山崎辺からかるとい

ふ女が勤めに来て居る筈だが、御存知ならちよつと教

えてくれねえか」

「エ、何ぢや知らぬが用があるなら勝手へ往て問うた

がよいわいな」

「サア、さうは思つたが、勝手も何かゴタゴタと忙しき

うだ。コレどうぞさう言はずと、御存知ならどうか教え

てくれる」

「エ、知らぬわいな」

「これはしたり、すげねえ女だな、マアさう言はずとち

よつと教えてくれる、御女中、どうか教えてくれる、わ

りや妹でねえか」

「エ、お前は兄様、恥しい所で逢ひました」

と、顔を隠せば

「苦しうない、く。関東よりの戻りがけ、母人に逢うて詳しく聞いた。お夫の為、主の為、よく売られた。でかしたくくナア」

「さう思ふて下さんすりや、わしや嬉しい。したがまあ喜んで下さんせ。思ひがけなう今宵請け出さるゝ筈」

「それは重畳。シテ何人のお世話で」

「お前も御存知の大星由良助様のお世話で」

「何ぢや、由良助殿に請け出される。それは下地からの馴染みか」

「なんのいな。この中より二三度酒の相手、夫があらば添はしてやろ、暇が欲しくば暇やると、モ結構過ぎた身

請け」

「さてはその方を早野勘平が女房と」

「イエ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」

「ムウ、すりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存なねえに極まつたな」

「イエく、これ兄様、あるぞへ、く」

「あるとは何が」

「サア、高うは言はれぬ。コレ、かうくと、囁けば

「待て、くくくソーレ」

「ムウ、すりやその文確かに見たな」

「残らず読んだその後で、互ひに見合はす顔と顔。それからぢやらつき出して、つい身請けの相談」

「アノ、その文残らず読んだ後で」

「アイナ」

「ムウ、それで聞こえた。妹、とても遁れぬそちが命、身どもにくれよ」

と、抜き打ちに、はつしと切れば、ちやつと飛び退き、

「コレ兄様、わしには何誤り。勘平といふ夫もあり、きつと二親あるからは、こな様のままにもなるまい。請け出されて親夫に、逢はうと思ふがわしや楽しみ。どんな事でも謝らう、許して下んせ、許して」

と、手を合はすれば平右衛門、抜身を捨て、

「可愛や妹、わりや何も知らねえな。親与市兵衛殿は六月廿九日の夜、人に切られてお果てなされた」

「ヤア、それはマア」

「コリヤ、びつくりするな、びつくりするな。まだ後にびつくりの親玉があるわい。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はな」

「兄さん、勘平さんは」

「その勘平は」

「勘平さんは」

「勘平は、勘平で、やつぱり勘平だわい」

「コレ兄さん、勘平さんにはよい女房さんでも出来たのかえ」

「エ、イ、そんな陽気な事ちやねえわい」

「そんなら兄さん、どうさしゃんしたえ」

「その勘平はな、腹を切つて死んだわやい」

「エ、く」

「ア、驚きは尤も、道理だく。ガこれには、何だ、様子のある、ア、しまつた、コリヤ妹が目を廻した、てつきりさうであらふと思ふた。誰かいねえか、誰か水を持つて来てくれる。待てるな、のるな。幸いの手水鉢、ア、今水をくれるぞ。ソリヤ水だ。おかるやい、妹やい、気が付いたか、く」

「オ、お前は兄さん」

「オ、兄だ、平右衛門だ、面を見る／＼」

「コレ兄さん、勘平さんはどうさしやんしたえ」

「エ、情けねえ、又尋ねるのかやい。その勘平はな、友

朋輩の面晴れに、腹を切つて死んだわやい」

「ヤア／＼／＼それはマアほんかいな。コレのうのう」

と、取り付いて

「コレ兄さんどうせう」

「道理だ」

「どうせう」

「道理だ」

「どうせうどうせう、／＼ぞいなあ」

「オ、道理だ／＼。様子話せば長い事、お痛はしいは母

者人、言ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに

聞かしたら泣き死にするである、必ず言つてくれなと

のお頼み。言ふまいとは思へども、とても遁れぬそちが

命。サその訳は、忠義一途に凝り固まつた由良助殿、勘

平が女房と知らねば請け出す義理もなし。もとより色

にはなほ耽けらず、見られた状が一大事、請け出だして

刺し殺す思案の底と確かに見えた。よしさうのうても

壁に耳、他より洩れてもその方が科、密書とがを覗き見たる

が誤り、殺さにやならぬ。人手に掛けよりわが手に掛け、

大事を知つたる女、妹とて許されずと、それを功に連判

の、数に入つてお供に立たん。小身者の悲しさは、人に

勝れた心底を、見せねば数には入れられぬ。聞き分けて

命をくれ、死んでくれ、妹」

と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げ、せき

上げ

「便りのないは身の代しろを、役に立てゝの旅立ちか、暇乞

ひにも見へそなものと、恨んでばつかりをりました。勿

体ないが父さんは非業の死でもお年の上。勘平さんは

くく三十になるやならず死ぬるのは、さぞ悲しかろ、

口惜しかろ、逢ひたかつたであらうのに、何故逢はせて

は下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬは私が身の因果、

何の生きてをりませう。お手に掛からば母さんがお前

をお恨みなされましよ。自害したその後で、首なりと死

骸なりと功に立つなら功にさんせ。さらばでござる兄

さん」

と、言ひつゝ刀取り上ぐる

「ヤレ待て暫し」

と止むる人は由良助、『ハツ』と驚く平右衛門、おかる

は

「放して殺して」

と、焦るを押へて、

「ホウ、兄妹とも見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を許

す。ソレ平右衛門、喰らひ酔うたその客に、加茂川でナ

「いかゞ計らひませうか」

「水雑炊を喰らはせい」

「ハ、ア」

「行け」

「ヤ、シテコイナ」